

—第3編— アブハの土の家

サウジアラビアの紅海側南端は、イエメン^{*1}国境と接する。かつてそのあたりの小村アブハ^{*2}を中心とする地域のフィールドサーベイを行った。我々にとって、ニッサンのジープがその調査旅行の信頼できる唯一の足であった。イエメンは石と土でできた高密度で高層の伝統的集合住宅で良く知られる。仕事場にいたイエメン人^{*}若いお茶くみ係のアリは、時々そんな夢のような住まいの絵をクレパスで描いてくれたものだ。その住文化の一端を、ここアブハ近郊で目にすることができた。

その一つは写真03-1が示す美しい土の家である。日干し煉瓦を積み重ね、少しテーパーのかかった立面は大地から立ち上がる住まいの天空への意思を窺わせる。土地の土で塗りこめられた平滑な表面には最小限の真四角な窓がくりぬかれ、厳しい気候から室内を守る。その周囲と立面の輪郭は漆喰で塗り固められ、その白が土の茶と空の青と見事なコントラストを描く。だが、この住まいを建てた職人は、それだけでは満足しなかった。外壁面上部に連なるリ



写真 03-1 土と漆喰と青空の対比と調和

*1
Yemen, アラビア半島最南端の共和国

*2
Abha, Saudi Arabia
南端の小島



写真 03-2 大空を突く土の家

ブ状の装飾は、白と茶の境界に柔らかくやさしい陰翳を落とす。なんと印象的な住まいだろう。

その近傍で見つけたもう一つの住まいはさらに強烈だ(写真03-3)。家の外形は同様だが、その壁面に土地で採れる粘板岩を剥離した石板が並行に差し込まれていた。幾重にも連なるこの庇が家の外壁に濃い影を連続的に落とす。これは明らかに設備機器に依らないパッシブな建築的環境技術の解答である。空冷エンジンの冷却フィンのような庇が熱を放射し、同時に日影で表面温度を下げる。かつての職人達は、現代の

ようなシミュレーションをしなくても、その効果を経験則で知っていたに違いない。

そして、土地の自然材料を手作業でつくりだす不揃いの建材が、機械による工業製品では決して得ることのできないテクスチャーを生み出し、一度見た者には決して忘れ得ないような表情で訴えかけるのである。これらの住まいは、恐らくもう存在しないだろう。しかし、これらの記録と記憶は、私にとってかけがえのない宝である。

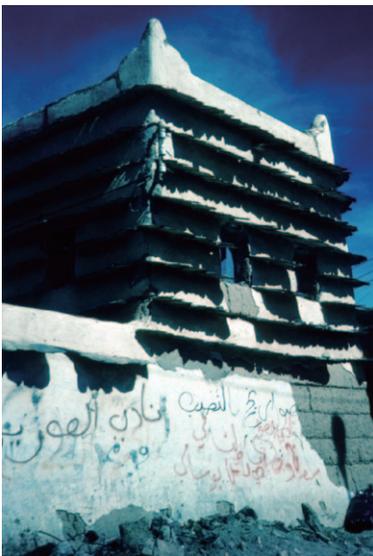


写真 03-3 石の冷却フィン付住居